

&green 北本暮らしオンラインツアー～首都圏近郊の緑あふれるまちの暮らしかた～
(令和3年1月24日開催)

司会・進行：林 博司 氏（北本市市長公室シティプロモーション・広報担当）
荒井 菜彩季 氏（北本市市長公室シティプロモーション・広報担当）
コーディネーター：江澤 勇介 氏（暮らしの編集室）
岡野 高志 氏（NPO法人北本市観光協会）
ゲスト：伊藤 博之 氏（有限会社伊藤ファーム）ほか

【セクション1：登壇者自己紹介】

○荒井 早速、事務局のご紹介をさせていただきたいと思います。私、先ほど申し上げましたように北本市でシティプロモーションを担当させていただいております、荒井と申します。本日進行を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

私も北本に4年前に引っ越してきました、北本の緑の魅力に魅せられて引っ越してきました。今、北本市の観光協会の方々と一緒にいろいろイベントをさせていただいて、最近の特技は焚火と焼き芋です。よろしくお願いいたします。

○林 北本市役所市長公室のシティプロモーションを担当しております、林と申します。荒井と一緒に移住・定住の担当をしています。本日はよろしくお願いいたします。

我々もオンラインは、実は初めての機会となっていて、ちょっと拙い点もあると思うのですが、温かく見守っていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

続いて、今日コーディネーターと進行を担当してくださる観光協会の御二人を紹介します。

○岡野 北本市観光協会の岡野と申します。本日は雑木林の方のご案内をさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

○江澤 同じく北本市観光協会の江澤と申します。後ほど、生中継というか林の方。今日、そもそもここは雑木林の会の活動拠点の場所なのですが、NPOでやられている雑木林の会の活動拠点にいますので、後ほどちょっとその街中にある林をご案内できたらと思っていますので、よろしくお願いいたします。

○岡野 是非ゆったり見ていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

【セクション2：北本市のプロモーション】

○林 それでは、最初に北本市の全体の説明をさせていただきます。

北本市のシティプロモーションということですね、今、北本市は「&green（アンドグリーン）」っていうのを打ち出して、市のプロモーションを行っております。この中で、市の全体の姿っていうのを見ていただければと思います。最初に北本市ってどこっていうところなのですけども。大体、埼玉県の真ん中、中央ちょっと東よりに位置してしまっていて、JRで40分から50分ぐらいで、東京まで出ていけるというところで、首都圏近郊のベッドタウンとして今までは人口が増えてきていたところなんですけれども。埼玉県の中央ということで、比較的いろんなところに行きやすっていう土地柄になってまして、東京までも40分、50分でいきますし、あとは圏央道が開通して、そのインターチェンジもありますので、成田空港ですとか湘南海岸とかまでも、車で2時間弱ぐらいで行けますし。あとは栃木とか群馬とか、この冬の時期ですと、スノーボードとかスキーに行ったりとかっていうところも、大体2時間ぐらいでは行けるっていうような、一応交通のハブになっているような地点にはなっています。

昨年からのシティプロモーション担当というのが新しくできまして、そもそも、シティプロモーション担当ができたきっかけが何だったのかっていうのがですね。北本市、もう人口がどんどん減ってきてしまっているっていうのがあって、特に若い世代の方が転出されているっていう現状があって、それってどういうことなんだろうということで、改めて、北本の魅力をそういう方々（若い世代）と一緒に考えてみようっていう取り組みをしたりして、その中で、北本の暮らしの魅力っていうのを高めるような、市民ワークショップですとか、あとは市内でのプロジェクトチームなんかを立ち上げながら、今、活動しているところです。

北本市、観光資源どんなのがあるのって言うんですね、日本一の北本トマトカレーというカレーフェスティバルとかで日本一を何度も取っているカレーがあつたりとかで、トマトが名産物であつたりとか、あとは、グリコピアという、東日本最大のグリコの工場があつたりとか、あとは日本五大桜に数えられている蒲桜っていう、桜があつたりとかっていうのを観光資源として売り出してはいたんですけども、改めて暮らしの魅力は何だろうということをも市民の方々と話し合ったところ、首都圏近郊のベッドタウンでありながら、この緑被率50%っていうのが、（緑被率というのは）町を緑がどれぐらい囲っているかということなんですけど、森であつたり、林であつたり畑であつたり、それが都市の面積がどれぐらいを占めているかっていうのが、50%っていうことで、すごい市が狭い市域の中にたくさんの緑が残されていて、東京23区とかは、20%を下回るようなところが平均なので、とても緑が多い町というところになってます。

そういった緑を生かした様々な取り組みを行ってしまっていて、雑木林でマーケットのイベントをやったりですとか、あとは狭い市域の中に無人の直売所が70ヶ所以上あるっていうようなデータもあつたりとか、あと大型のショッピングモールがないので、意外と個人店でおし

やれなお店が多いよねっていうところを、住む魅力として挙げてくださる方が多いです。市の中に、自然観察公園という大きい自然の県立の公園があるんですけども、そこでは様々な生物が確認されていて、鳴く虫の数とか、トンボの数は確認数日本最多というふうにも言われているような、豊かな動植物が残されている町になっています。

あと、非常に災害に強い街だということで、この北本市がちょうどこれ、立体の地図を示したものになるんですけども、北本市の市域を囲ってみると、北本市がちょうど高台に位置していることがわかると思うんですけども。高台にあるおかげです、例えば荒川とか、利根川とか大きな川が氾濫しても、北本に対しては全然洪水が起こらないということで、もう非常に災害に強い街とされていまして、最近リクルートさんが「suumo」という冊子の中で、災害に強い街ランキングという、南関東の首都圏184市区の防災力っていうのを調べた調査だと、北本は3位ということで位置付けられていて、この高台にあるために災害に強いっていうところと、あとは病院の数とかということも、いろんな指標を取った上で、この南関東で、3番目に災害に強い町というような客観的な評価をいただいているところです。歴史もなかなか深い街になってまして、古くは縄文時代に、北本市には大量の縄文遺跡が残されてまして、北本市で特にこの「デーノタメ遺跡」っていう関東でも最大級の遺跡を見つかっていたりして、非常に縄文時代から人が多く住んでいたと言われていています。これが、そもそもこの地が高台にあって、非常に災害にも強いということと、動植物も豊かだっていうことで、こういった環境が今でも引き継がれているっていうのが、北本の魅力になるのかなと思います。こちらが遺跡の分布で、これが縄文遺跡の分布図なんですけれども、非常にもう、特にこちらの西側に至ってはもう本当に敷き詰まってるというような状況になっております。

こういったような、市の魅力をですね、今「&green」っていうプロモーションコンセプトで、いろんな人にPRを進めているところです。その「&green」というコンセプトのもとです、市役所の芝生広場、これ市役所の目の前にある広場なんですけど、ここで「みどりいち」といったマーケットをやったりですとか、あとは、農作物の大きい直売所があるんですけども、その脇に新しくできたカフェでは、地場のフルーツを使ったデザートを出していたりですとか、緑のよさを伝える冊子を作ったり。そして、今年度「マーケットの学校」という事業を特に力を入れてやってみまして、雑木林ですとか芝生広場とか、あとは市の西側にはキャンプ場とかもあるんですけども、そういったところで仮設のマーケットイベントをやることで、多くの人に来てくれたりとか、あと新たな出店者の方が生まれてきてくれたりとかっていうところを、積極的にやっているところです。

我々の担当でふるさと納税も担当してまして、ふるさと納税を通して、いろいろ今拠点づくりとかっていうところにも力を入れてやっているところになっています。今日はちょっと西側の自然観察公園といった、すごい自然豊かなエリアではなくてですね、中心市街地の雑木林にどんぐりハウスを作りたいっていう企画を昨年ふるさと納税を通してやったんですけども、それによってできた拠点施設から、今回お送りさせていただいています。

ちょっと今からですね、観光協会の二人に、その中心市街地に残されている、住宅地残っている雑木林の様子を中継していただきますので、そちらの方に切り換えさせていただければと思います。何かご質問等あれば、随時チャットでも受け付けておりますので、気軽にコメントいただければと思います。よろしくお願いします。

○荒井 はい、それではこれから皆様にですね、市内の雑木林をご案内させていただきたいと思います。ちょっと画面を切り換えます。今、観光協会の江澤さんが、カメラを持ちながらこれから配信をしていただきます。

【セクション3：雑木林を歩いてみよう】

○江澤 ここからは私が進めさせていただきます。ということでですね、今日僕らがいたのは、この今、「北本雑木林の会」って書いてあるんですけど、この、街の中に残っている林があるんですけども、この林自体は私有の土地になってまして、それをNPO法人雑木林の会というチームが、もう30年ぐらいに渡ってですけども、私有の土地を放っておくと、不法投棄のゴミが溜まったりとか、暗くて治安が悪いとか、そういうことになってしまうんですけども、この雑木林の会というチームが、それを手入れする代わりに雑木林の中を使って活動させて欲しいということで、活動してきたという歴史が街にあります。この建物が、ちょうどさっきの林君（北本市職員）の説明にありました、ふるさと納税型のクラウドファンディングで、雑木林の活動の拠点を作りたいということでできました「どんぐりハウス」という建物になります。この林のほりにありまして、ウッドデッキもあって、今までトイレとか水場とかは林の中はなかったんですけども、今回この拠点ができて、トイレとか、手を洗う場所っていうのもできたおかげで、今回の配信もそうなんですけども、いろんな活動の拠点になってきているというところですよ。

今、岡野が今日ですね、奥さんお仕事なので子供を見なきゃいけないということで、子供を見ながらという展開になっているんですけども。岡野の家の子供以外に何人か周りの家の子供が集まったりとかして。ちょうどさっき雨が上がったので、もともとの今日予定していた火を炊いたりっていうことをやり始めて。薪の…ということで子供たちが働いてくれるという。笑

(子供たちが薪をリヤカーに載せて運ぶ様子)

○江澤

(子供たちに) じゃあ頑張って運んでください、頑張ってね。ゆっくりでいいよ。いってらっしゃい。

○子供

ガタガター！

○江澤

はい、ということですね結構子供が遊ぶような場所になっていたりとか。公園で遊ぶのとやっぱ違って。さっきの、薪の材料になってるものもこの林の中の木を切って出してるものなので。そもそもが雑木林っていうのはもともと農家さんの、畑があって、お家があって、林があってっていうサイクルの中で、手入れしながら育てていくような林なので、ある程度年齢になったら木を切って間伐しないといけない林なんですけども。なかなかそういうサイクルが今絶たれてしまった中で、林が減っていくってことはあるんですけども。北本の場合は雑木林の会があったりとか、最近そこに子どもを公園とかじゃなく自然の環境で遊ばせたいということで、「森と子育ての集い」っていうチームと一緒に関わったりとかしてですね。林自体に新しいサイクルが生まれるっていう中で、やっぱりこれは残した方がいいんじゃないかっていうことがだんだん皆の中にちゃんと出てきたかなあというところになっています。

この林なんですけど、すぐ近くに道が通ってたりとかですね、向いも小学校だったりとか、住宅街がある中に急に感じるようになっていまして、駅からでも15分歩けば着くかなというところなんですけど。暮らしの隣にこういう緑があるっていうのが北本の一つの特徴かなと思います。荒川の方まで行くとともとの自然というのも結構残ってるんですけども、それ以外にもこういう家のすぐ近くに林があるっていうことが特徴なのかなと思います。

○岡野 雑木林の会の場合は、1990年からにNPOになったと記憶してますのでもう30年以上、こういう場所をキープしていく活動を続けてきてくれているという。雑木林の会の活動があったからこういう場所が残っているっていうことなので、僕ら観光協会にとってもすごく感謝しています。こういう形で遊歩道も整備されていまして、比較的自由に出入りできますよっていう場所になっています。広さでいうと、ざっくりなんですけども。横で20,30メートル、奥行きが100メートルちょっとあるんじゃないかなと思いますね。

(林の中にリヤカーで遊ぶ子供たちが現れる)

○江澤

子供たち、また遊んでます。(子供たちに)はいじゃあまた薪を取ってください。

○子供

はい。

○江澤

お仕事してください。

こういう林が街の中に、雑木林の会を管理しているものがいくつかありまして、これ地図なんですけども。ちょうど今、この5号林という林にいまして、目の前が小学校ですけども。この周りにも、いくつかちっちゃい林が連なっていたりとか、ちょうど高崎線沿いに緑のトンネルがあるのは北本だけなんですけど、その中央緑地っていうのも、この近くだったりします。

最近ですね、その林の中の楽しみ方ってのも結構変わってきて、コーヒーを出したいっていうことを活動してるような雑木林の会のお母さんたちもいるので、そういう人たちが集まって、こういう看板を作ったりとかですね。どんぐりハウスの前身でログハウスを立てようとしたんですけども、木を製材していて、ここに生えているもので製材して小屋を建てるということをずっとおじいちゃんたちが計画してやっていたりとかですね。ただちょっと時間がかかりすぎるといことで、手前側にちょっと違う形でどんぐりハウスっていうのを立てたという経緯があります。

やっぱり、雑木林の会の方でも子供たちの遊び場になるといいなっていうのがあるので、こういうシーソーみたいなものとか、ブランコ、ベンチのようなものが、結構ちゃんと整備されていて、危なくないよということ、ちょっと古くなってきたら綺麗にしたりとか、そういうこともしっかりやってくれています。

はい、またちょっと看板がありますので、「焚火コーヒー」。はいこんな感じで、今日天気がよければ、本来はここで焼き芋やったりとか、ピザを焼いたりとか、いろいろできるので、食べてるところをお見せしたかったんですけど、さっきちょうど雨がやんだので、今これが薪割り。斧が刺さっていますね。ちょっと雨で湿気ってるんであんまり燃えないというか、燃えづらい。あ、でももう大分燃えています。これピザ窯、常設ですかね。

○男性 そうですね。

○江澤 これいつできたんですか。

○男性 3年前くらいです。

○江澤 これは雑木林の会で作ったんですか。

○岡野 私は観光協会で、こちらは早野さんに来ていただいたんですけど。

○江澤 早野さん、よろしくお願いします。

○岡野 早野さんは、雑木林の西側徒歩3分くらいの場所に住んでいるんですけど、いつも庭みたいな形で遊んでいる、いつも一緒にやってもらっているメンバーなんです。雑木林で

美味しいものを食べたりお茶したいっていうときにピザ窯を作りたいなっていうことになって。集まるメンバーでこれを企画して。雑木林の会で、月に1回お母さんたちがプレーパークっていう、子供たちを自由に遊ばせるっていう会をやっていて。そのお母さんたちと一緒に企画して自作したピザ窯です。

○江澤 なるほど。今日これから何か焼くんですか。雨やんできたし。

○岡野 今日は伊藤さん家のあそこにある芋を使って、焼き芋を。

○江澤 後ほど、伊藤さんの話が出てくると思うんですけど。これ直売所で昨日買ってきた。

○岡野 もちろん。今日雨じゃなかったら、朝から焼こうと思って。めちゃくちゃ美味しいので、雨が上がったら早速焼こうかなと。

○江澤 いいですね。観光協会としてはこういう話が、暮らしの隣にあるってというのは、すごい価値だなって、まさに体现してると思うんですけど。改めて言葉にしてみるとどうなんですかね。こういうものがあるってというのは

○岡野 そうですね。やっぱり今自分も市内に住んでいて、やっぱり外に遊びに行くっていうのは、コロナの関係でなかなかできないっていうのもあって、ここへ自分は毎週来ているんですけど。やっぱり子供もまだ小さいのでなかなか家に居るわけにはいかない。皆さんでオープンエアの中で集まる人でこういうふうにやったりとか。あとは、毎週薪割りを今やっていて、今もちょっと割っていたんですけど、もうそれだけで別に遠くに行かなくても十分というか、それこそが自分たちが生きることで、そういう場所があるから自分たちの自然を守りたいとか、そういう活動に参加できるきっかけがあるってというのはすごい幸せだなって思います。

○江澤 子供たちも単純に楽しそうですもんね。遊び場。

○岡野 そうですね。やっぱりこういう場所があると嬉しい。

○江澤 早野さんは、もともと出身は北本ではなくて、移住というか。

○早野 そうですね、移住。

○江澤 もう何年前ですか。

○早野 10年ぐらい。

○江澤 きっかけというか、林があるから来たとか、そこまではいかないかもしれないけど。

○早野 北本は移住先として考えていて、自然が多いということもあって。この辺にさっき住んでいると紹介してもらったんですが、この森があることからということはありません。

○江澤 実際、今日も子供たちも遊びに来てますけど、本当にフル活用してますよね。

○早野 そうですね。庭として使わせていただいております。笑

○江澤 当然雑木林の会にも入って、その管理というか下草刈りとかもやるし、でもそれも半分遊びというか。やりながら。

○岡野 使わせてもらっているから、逆にお手伝いとか。

早野さんちのお子さんは小学校に上がる、一番大きい子。雑木林の使い方がめちゃくちゃうまくて。この前タヌキを見たとか、タヌキ見たスポットを教えてくれたりとか。キツネがいたよとか。

○江澤 結構動物も多いですよ。

○岡野 聞こえたかわかんないですけど、今鳴いているものとか。もうちょっと奥に行くと朝とかすごいです、鳥の鳴き声。

○早野 キジがいました、普通にいます。

○岡野 鳴き声で起こされますね。

○江澤 あの「ケーン、ケーン」ていう鳴き声で。

○岡野 キツネの鳴き声が聞こえる。

○江澤 キツネもいるんですか。タヌキとかはよくいますけど、キツネはなかなかいなそう

な気がしますけど。

○早野 年に1回見るぐらい。

○江澤 いるんだやっぱり、みたいな。

○岡野 (ゲストの) 伊藤さんちは結構よく見ているそうです。

○江澤 そうなんですか。伊藤さんの畑もすぐ近くだったりするし。あとでちょっとお話もありますけども、この林自体の所有っていうのが何区画かに割れてはいるけども、伊藤さんが大きく区画を持っていらっしゃることもあるんで。ここ1、2年くらいで僕ら林を使わせてもらって遊んでる人たちの、繋がりもちょっと出てきて、すごく感謝めっちゃしてます。

○岡野 それは間違えないです

○江澤 小さい町なんで、関係性が見えるってのはすごくいいことですよね。

○岡野 自分たちができることを最大限やっていきたいというところはありますね。

○江澤 ありがとうございます。早野さん、ありがとうございます。

これでとりあえず、雑木林のレポートを終わりにして、いったんスタジオというか、どんぐりハウスにお返ししたいと思います。

【セクション4：農家さん、移住者さんの話】

○荒井 はい、皆さん北本の雑木林を見ていただきましたがいかがでしたでしょうか。

今、北本市の方でいろいろシティプロモーション事業等を行ってるんですけども、この雑木林でイベントをやったりですとか、この後もちょっと紹介をさせていただくんですけども、こちらでいろいろ雑木林の中を散歩したり、みんなで一緒にご飯を食べたりみたいな取り組みを行っています。

やっぱりこの雑木林はすごい北本らしさがあって私もすごく好きで、今回オンラインだったんですけども皆さんに、この魅力が少しでも伝わればいいなと思っています。もしよかったら感想もいただければ嬉しいです。

で、今見ていただいた雑木林なんですけれども、こちらこの後ご紹介をさせていただく、伊藤ファームさんの所有地でもあります。こちらの、雑木林とですね。伊藤さん、北本市で19代続く農家さんなんですけれども、ここの雑木林の落ち葉を堆肥として活用しながら昔ながらの手法で農業を営んでいらっしゃいます。この後ちょっと動画を見ながら、伊藤さんの

ご紹介をさせていただければと思います。

<「暮らしの学校」の紹介動画①>

○荒井 一部ちょっと音と画像が乱れてしましまして、聞きづらいところ等があったかもしれませんが申し訳ありませんでした。

今見ていただいたのが10月に行いました「暮らしの学校」というイベントで、こちらの雑木林と、伊藤さんの畑にお邪魔をさせていただいて、農業、サツマイモの収穫体験等させていただいた映像になります。

本日ですね、このどんぐりハウスにですね、伊藤さんにお越しいただいてますので、その画像を振り返りながら皆さんに伊藤さんの紹介と、サツマイモの栽培やお野菜の栽培にかかる思い等をちょっとお話いただければなと思います。

○江澤 伊藤さんです。

○伊藤 初めまして。伊藤ファームの伊藤です。よろしくお願いいたします。

○江澤 一番最初に見ていただいた映像、中継した林を伊藤さんに使わせていただいて、実際に伊藤ファームさんのお野菜を、芋掘りを体験させていただいて、その芋を使ってカレーを作ってみんなで食べるっていうことを。あと、伊藤さんの畑を見学させていただいてっていうことを、「暮らしの学校」という観光協会の企画としてやらせていただいて、その映像見ていただいたんですけど。あんまり、今までその伊藤さんが林を持たれてるじゃないですか。

○伊藤 はい。

○江澤 地元で農業をされている。しかも19代も続いているっていうところもあれば、街の人が結構知らないというか、僕もお話を初めて聞いて19代も続いているんだとか、林の持ち主は伊藤さんなんだ、直売所があそこにある伊藤さんがそうなんだということを、やっぱり知らなかったんですけど。こういう形でそこでカレーを食べたりとか芋掘りを体験させていただくっていう中で、そういうことを知れることは、すごく僕らも価値があることだなと思って。やらせていただいて。実際に参加した40人ぐらい、参加された方はご家族もいたので、すごい満足度が高かったと思うんですね。実際参加者からは「良かった、楽しかった」っていう意見が多かったんですけど。実際受入れる側というか、巻き込まれた側としてはどうだったかみたいな話をちょっとお聞きできたらなと思うんですけど。

○伊藤 はい。これももうなんでもう、私たちはもう1年間のルーティーンとして、年間100数種類作ってる中の一つのサツマイモの栽培っていう形で、今まで行ってきて。昨年、声をかけていただいて、初めてこういう体験型っていうものにさせていただいたんですけども。私たちにとっては当たり前のことが、皆さんを体験したいって、ここまで喜んでいただけるっていうのは想像以上だったので、こちらとしてもやってよかったなと思いますし。我々が直売所があるんですが、お客さんと面と向かって話ができたりとか、通じ合いながら説明できたりとか、さらにもう1個体験していただくっていうことを初めて体験していただいたので。また、さらに、野菜を作っているこちら側としては、またそのアピールポイントというか、野菜作りの現場を見られるっていうのは本当に面白いイベントだったなという印象は持っております。

○江澤 ありがとうございます。そうなんです。伊藤さんのところはまず、普通に暮らしてる人たちからすると、大型レンタルショップの、DVDとかCDとかレンタルしてるゲオという、結構北本ながら大きいお店があって、その駐車場も大きいんですけど、この一角に直売所があって。野菜をそこで売られているということで、年間120から130種類くらいの野菜を作られていて。まだ常時、季節ごとに10種類以上直売で売られているっていう、めちゃくちゃ充実した直売所があるっていうのが、北本に住んでいる人の最初の入口になってると思って。結構みんなそのことは知ってたりするんですよね。「あそこの直売所がいいよね」とか、あと焼き芋も売られていて、それもすごい人気があって、「いいよね」って話は今までずっと、してたと思うんですけど。

その伊藤さんの畑が19代も続いている、しかも、その直売がほぼメインというか、直売所とスーパーの産直コーナーというか地元野菜コーナーでほとんど売られているっていうふうに伺ったんですけど。やっぱそういうこともやっぱり全然知らなくて、僕らかなりびっくりしたんですけど。何か直売所がメインにあるっていうのは、やっぱり農業をやっている中で、市場に出しているのとは違う特殊なやり方になってる部分っていうのはあるんですかね。

○伊藤 そうですね。なかなか有人で直売所メインで自分で持って行く、それを中心として行っても、なかなか多分、北本市の中でもう多分珍しいと言われてます。当然たくさん北本市も農家の方がいらっしゃる中で、この環境であったりとか、作る物であったりとか、営業形態というものを考えたときに、直売所のルーツは祖父母からなるんですけども、そういったものがあつた中で、うち独自のものを特色を出すにはどうしたらいいだろうなってこう考えていく中で今の形ができてきたんですね。

○江澤 焼き芋を始められて何年ぐらい。

○伊藤 そうですね、もう10数年にも20年ぐらいですね。

○江澤 最初は芋の種類が、今は「べにはるか」をやってるけど、当時は。

○伊藤 最初は「紅あずま」っていうスタンダードな種類を作っていて、そもそも最初は生のさつま芋っていうか、袋に入れて売られる物がメインだったので。そこから少量でつば焼き芋って呼ばれる、炭を起こして大きい壺の中で焼く、少量の焼き芋から始めたんですね。それをやっていく中で、いろいろ要望であったりとか、もう10数年前、焼き芋ブームっていうか、種類もいっぱい出てきて。その中で、例えば今度子供が親を引っ張って、子供が食べたいと思うようなものだったりとか、そういった展開として「そういうものも必要だよな」というところから、何種類か品種を試して行って、結果今「紅はるか」というものになってるという状況なんですけども。

○江澤 紅あずまは、結構ほくほくした感じのお芋ですよ。

○伊藤 そうですね。昔ながらで、どちらかと言えば調理、例えば、天ぷらであったりとか、おかずとしても昔からこう親しまれてるようなものだったので。基本、最初はそれを自分が携わるなったときはそれを作っていたので、最初はそれをベースにっていう形ですね。

○江澤 直売所を通して焼き芋とかやり始めて、お客さんから「しっとりしたのとかも食べたい」とか言われたり、「あっちの方が売れるな」とかをいろいろ試しながら変えてきてっていう感じなんですかね。

○伊藤 そうですね。

○江澤 なんかそれもやっぱり直売所があって、自分たちでダイレクトにお客さんの声を拾うっていう、それ自体が農家さんとしては結構珍しいと思うんですよ。あんまり農家さんって自分の作った野菜を食べる人と接する機会っていうのはないんじゃないかなというイメージはあるんですけど。

○伊藤 そうですね、いわゆるその産地であったりとかって基本的な流れっていうのは、組合があってそこから市場、業者に出してっていう形になってくるので。直接消費者の意見であったり、常日頃直売所などでのお客さんとのコミュニケーションの中からヒントを得て、直接話を聞いた中で「どういうものいいんだろう」というものがうちとしては常にできる環境だったので。例えば、決められたまず少数の品目で大量出荷かっていうのではなくて、うちは基本的少量多品目でやっているんでそういった調整ができる形があったので、お

客さんの要望に合わせて調整していけるようなことはしていこうというそういう形になったので、そういったものがすごくはまったというふうに思います。

○江澤 市場だと規格に合わせて、商品になるかならないかが決まってしまうけど、直売所だと規格に当てはまらないものも含めて売り切っていくことができるということですよ。

○伊藤 そうですね。

○江澤 伊藤さんの直売所は水、木曜日がお休みなんですって。

○伊藤 基本的に、焼き芋、さつま芋とトマトのシーズンなので、10月から7月いっぱいまでは、営業日は週4、火・水・金・土ですね。7月いっぱいまでトマトが終わって、あとはさつま芋の準備もあり、気温もすごく高くなるので、どうしても品物が少なくなるしもちも悪い8月と9月は週2になります。そういう変動型でやらせてもらっています。

○江澤 お昼から営業しているじゃないですか。それは午前中に野菜を採って、それを詰めて、売り場に用意するから、その日採れたものがその日に買えるっていう状態なんですよ。

○伊藤 そうですね。夏場にはトマトなんかは朝日が昇ると同時に収穫したりとか、収穫量が多いとどうしてもやっぱり品種も揃えるので、5、6時間はかかってしまうんですよ。なので、営業としては1時からって形になってしまうんですけど、なるべく、できたてというか本当に数十分前まで畑にあったものを出すって形になるので。スーパーとかの地場産のものも結構クイックリーのものなんですけど、さらに収穫してから店に並ぶまでが早いという。それも一つの特徴として出せたらなと思っているんです。

○江澤 小さいからできるそうですね速さみたいな。

○伊藤 そうですね。

○江澤 本当それは地元の人というか、それを買う人からするとものすごくありがたいこと。しかも、さっきの映像のワークショップじゃないですけど「暮らしの学校」みたいに採れたてのものが食べるっていうことを一歩超えて、それを取る体験をさせてもらえるとか。やっぱりより愛着が湧くというか。大変だし。笑
なんか室に土の畑の下に保管した方が芋は熟成して甘くなるんだよとか、そういうこともやっぱりすごい面白いこと。それを実際見せてもらえるとか、子どもは室に降りて喜んだり

してましたけど。ああいう体験をさせてもらえるっていうのは本当に、僕らとしてもすごく、嬉しいし、自分の子どもにもその知らせたいし、なんかそういうのもすごい感じるんです。いい企画ができてよかったなと思っています。ご協力いただいて本当にありがたかったです。

○伊藤 こちらも本当にありがたい限りで。

○江澤 何か今後もそのお芋以外でも、いろんな時期にいろんなことを相談させていただければと思っているので。

○伊藤 こちらも本当に、是非是非参加させていただければ、非常に励みになりますのでよろしくお願いよろしくお願いします。

○江澤 今日移住したい方がいろいろ見られてるので、本当に伊藤さんの「暮らしの学校」の次の時とかにも是非ご参加いただけたら、良さも体感していただけると思うので、その方たちご参加いただけたらと思います。お話ありがとうございました。

○伊藤 ありがとうございました。

○荒井 伊藤さん、ありがとうございました。
この後、次の動画を、準備させていただきます。

○江澤 ということで、一本目の動画は、「暮らしの学校」という形で、市内の雑木林なり自然の資源を生かしているいろんなことを体験していただくようなワークショップを開催してますので、そちらの会場として、芋掘りもやらせていただいた伊藤ファームさんのお話を聞かせていただきました。

今日は、もう一本動画を用意してまして、そちらも「暮らしの学校」の別の会の動画になるんですけど、もうちょっと荒川に近い方ですね。北本は荒川沿いに街があるんですけども、荒川沿いの方もちょっと都市からは離れるんですけど、自然が豊かな場所になってまして、そちらの方で農業をやられてる今井さんっていう方のお宅に伺って、今井さんの畑で栗拾いをした時の動画がありますので、そちらを、見ていただこうと思います。

<「暮らしの学校」の紹介動画②>

○江澤 はい。ということで、動画を見ていただきました。

さっきは、会場を貸していただいていたというか、巻き込まれていただきたいと伊藤ファ

ームさんお話を聞いたんですけども、今度は「暮らしの学校」で企画をやりようと思いついた観光協会の岡野さんに「何でやってるの？」って話をしてもらおうかなと思います。どうですか岡野さん。

○岡野 そうですね。私も確かにそう言われるとなんでやっているのかなって感じもあるんですけど。私は北本生まれ北本育ち、今34歳で。江澤君とは中学校の同級生で、いろいろやってるんですけども。観光協会に入らせてもらって8年目になります。農業のやってる方、伊藤さんとは急激に密にやらせていただいているんですけど、農具がかなり大好きになっちゃっています。8年も地元の仕事に携わっていると、やっぱり農家さんとの付き合いってというのは、少なからずできてきて。北本って、先ほど伊藤さんは少量で多品種やられてるってお話があったんですけど、北本ってわりと高台に位置するところから少しちょっと低いところまで、要は高台の場所ってというのは畑とか、果樹とか、そういったものがやっぱりすごい多くて。ちょっと低くなると、伊藤さんちなんかがそうなんですけども、ちょっと低いところ田んぼを陸田としてやられたりという形で、この米から麦から野菜から果物まで、本当めちゃくちゃ作ってるって場所なんですよね。そこで、自分は観光協会をやっていて農家さんと付き合いが出ると。やっぱりこの時期に、この農家さんのものを買に行こうっていうのが、何となく自然にできてきているなっていう感覚です。

○江澤 季節の感覚が。

○岡野 この時期になったらこの直売所が空いてるから、じゃあここに買いにいこう。私は近くに梨園さんがあって仲がいいので、この時期になったら梨を買いに行こう、この時期になったら栗を買いに行こうと、梅を買いに行くならこことかっていう決めてるわけですね。そういったのを、私どもは北本の方に北本をもっと好きになって欲しいという企画で始めたんですけど。

○江澤 プロモーション事業は全体としてそういう目的ですよ。

○岡野 私の周りには結構それを言って、みんな買いに行ってくれるんだけど、結構そういうのって実は住んでても知らない方って本当は多いんだなっていうことにふと今年気づいたっていうか。なんかみんな知ってんだろうなと思って。当たり前じゃん、そこに良いものあるんだからって。だけど、私の子供の保育園のママさんとお知り合いになると、そのママさんとかって、北本にたまたま越してきて、全く知り合いがいない状態で、その農家さんがいることすら知らないし、そもそも買いに行けることすら知らないとかっていうことで、何か接点もなかったんで。でも、美味しいものが食べられるってやっぱり皆さんすごいハッピーだし、今回の「暮らしの学校」の企画自体は、伊藤さんの時もそうなんですけど、ただの収

穫体験じゃないようにしたいなという。やっぱりそこで農作物を作ってくださってることに感謝して、お手伝いみたいところで何かできないと、長いお付き合いにはやっぱりならなくて。消費するだけになっちゃうんで。

○江澤 レジャーとかサービスとしての収穫体験みたいな、観光ではないと。

○岡野 まあ、それもありだけど、北本の規模だとそれはちょっとできない。皆さん小規模で、本当に少量多品種でこだわって作ってる方が非常に多いので、そういう形の拾い方はできないので、だったら自分たちの方で、そういう意識がわかってらっしゃる方に、この農家さんと直接繋ぐっていう目的で。今日来ていた西村さんもそうなんですけど、1回今井さんのところに（動画の）栗拾いの前に、梅狩りをやらせてもらったんですけど、梅狩りに行った時に西村さんと一緒に行ったんですよね。そしたら西村さんは今井さんとめちゃくちゃ気が合ったのかわかんですけど、やっぱその後も梅狩りに結構通って、今井さんの方にこう収穫のお手伝いをするみたいな関係を作ってくださって、そういうのがすごい嬉しいな。そのように農家さんを知ってもらうきっかけを作りたいなと思って、今回ね、この「暮らしの学校」っていうのをちょっとやってみたいなと思いました。

○江澤 なるほどね。確かにワークショップ参加してる人でも、今井さんちは無人直売所が家の前にあるんですけど、時期になると栗が出るんです。広くて大変なだから消毒の回数を減らしてとか、ものとしてはすごくいいものになってるっていうのを地元の人には知ってるから。無人直売所なのに、路上駐車して買いに来る人が結構いるみたいな。

○岡野 伊藤さんちもそうだと思うんですけど。私の母親なんかも狙いまくって。いつ（栗が）出たともチェックしてて。

○江澤 それをやっぱワークショップとかやってて、「北本に越してきて2年目です」ぐらいの30代、40代の人達は知らなくて、その話してたら「いや、その場所を知りたいんですよ。」ってことが確かにあって。

○岡野 そういうことです。

○江澤 北本だと、都心まで1時間かかるかかからないぐらいなので、ベッドタウンとして、昔から住んでいる人、団地ができて入ってきた人とか、住宅ができて入ってきた人とか、層になっている。その中で街のもともとやってたことは歴史として共有されなかったりするってのはもったいないことだと感じますね。

それをただ、入口は別に教育じゃなくても美味しいものをみんなで食べましょうみたいな

形で、実際に芋掘りを体験できるとか、取った後、これがこういうカレーになっていますとか、栗ご飯食べますとかっていう形でシェアできるっていう入口に「暮らしの学校」は今なってるっていうふうに。

○岡野 自分としても先ほど伊藤さん話だったと思うんですけど、さつま芋であっても本来はその農家さん、今井さんたちもちょうど9代だったかな、伊藤さんはもう19代ですか。農家さんの時間軸って、野菜にも1年間の時間軸があるんだけど、なかなかすぐ観光農園みたいな形だとその一部分しかやっぱり感じられなくて。それよりはこう収穫のお手伝いと農家さんと直で触れ合う時間っていうのをある程度意識的につけていか何とか長く、直接触れ合ってもらってというのをやっぱりやってもらいたいけど。そうなることで、この時間軸とか、手間暇みたいな部分が、何かこう感じ取ってくると、同じ野菜でも、やっぱりすごい特別なものを感じてくるっていうのは、やっぱり安心をいただいているっていうのは個人ちょっと近いかな。この人が作ってくれているから、あっちがいいっていうのがあります。

○江澤 そういう農家さんがいるっていうことはやっぱり土地のポテンシャルということ。

○岡野 そうだし、北本で自分も住んで、実際に住んでよかったなと思えることを、皆さんと一緒にシェアしてるっていう感覚ですね。今井さんや伊藤さんにご協力いただいているっていう。

○江澤 当然、それはそうですよ。笑

○岡野 わがままだ聞いていただいているという。

○江澤 今日、今井さんがオンラインで参加いただいているんですね。ちょっと今井さんにお話を聞いてみたいと思うんですけど、今井さん、マイクをオンにいただいても大丈夫ですか。今井さん聞こえますか。

○今井 はい、声入ってますか。

○江澤 今声だけ入ってます。大丈夫です。先ほどの今井さんの農園での栗拾いの映像、動きがカクカクで申し訳なかったんですけど。

○今井 映像が流れるなんて全然聞いてなかったんですけど。

○江澤・岡野 ははは。笑

○江澤 確かに言ってなかったかも知れなかったです。天気が悪かって決まったので急遽作ったんです。

○岡野 江澤が寝ないで作りました。

○江澤 今井さんとの知り合いだったというか、ちょこちょこお会いしてはいたんですけど、こういった形で「暮らしの学校」とかでがつつりいろんな人も来てやるっていうのは初めてだったと思うんですけど。やってみて感じでしたか。

○今井 うちとしてはすごく助かってる部分が多くて。私も実際10年くらい前まではサラリーマンだったので、農家どっぷりというわけでもなくて。母親ももう80歳を過ぎてますから、母親と二人でやってる中で、ちょっと梅の収穫がもったいないけど手に負えないような状態で。じゃあちょっと誰か若い人に手伝ってもらえたら嬉しいなということで、そのときも、収穫した分は全部持ってっていいからみたいないな感じで。うちもあんまりの予定とかもなかったんで、そんな感じでやらせていただいたけれども。今の栗の収穫にしても、ほぼ毎朝、毎朝母親と私とで畑を栗拾いやってっていう形でやってるので。今までの感じというよりも、ちょっと昨シーズンは収穫量がわりと多い方だったので、結構それを、20人ぐらいの人数で手伝っていただけると本当に非常に助かることなので、1日でも2日でも休めたっていう感じで。もう本当に助かったなあっていうのが正直なところですね。

○江澤 最後の映像の最後にもありましたけど、子供たちがネットに入れるところまで、遊びみたいにしてどんどんやっていくような感じがあたりとかして。ある意味では、農業の担い手も減ってきちゃうというか、難しくなってくる中では、ちょっと遊びというか、楽しみというか、入ってくることも、ちょっとその環境を維持していくための何かにもなるのかなというところが。

○今井 今日はこういうところなんでね、ちょっとお話をさせていただければ。僕なんかの家の周りでもやっぱり畑やめちゃう人が結構多くて、畑空いてるところがいっぱいあるんで、もし移住されたいっていうところで考えている方がいらっしゃるんだったら畑も含めて借りてもらえるとすごく嬉しいですよ。そういうところが結構今たくさんあるんで、是非ちょっと家庭菜園ぐらいな感じで畑やってみたいっていうことでも。あと、果樹とかの栽培にも非常に向いてる土地だと思うので、果樹を植えて収穫したいという感じで考えられてる方がいらっしゃるのであれば、そういうのも一つメリットになるのかなっていう感じはしてますね。

○江澤 これだって、今日のテーマは、「首都圏近郊の緑溢れる町の暮らし方」ですから

ね。間違いないですよ。

○岡野 嬉しいです、今井さんそう言っていただると。

○江澤 観光協会としてあったんでそれをもうちょっとこう整備していきたいなというふう
に思っ。それが観光なのかっていうとちょっとあれだけど、シティプロモーションとして
は。

○今井 畑とか借りてもらえれば、僕なんか口は出しますんでね、結構ね。そういう農家
の先輩方いっぱいいるんで、世話焼きな方がね。ご老人もたくさんいますから。楽しくでき
ると思いますんでね。

○江澤 ありがとうございます。じゃあ、今井さんの農園の栗拾いにも参加していただい
た、実際に北本に移住して暮らしていらっしやる西村さんにちょっとお話を聞きたいと思
っています。

○西村 初めまして、4年4ヶ月前に北本に引っ越してきました。引っ越してきたっていうこ
とも含めて、簡単にちょっとそこまでに経緯を、3、4分ちょっと話をさせていただきます
けど。今現在66歳です。出身はですね、山口県なんですね。山口県から学生で出てきて、都
心の会社にずっと勤務してるサラリーマンということなんですね。

一つの区切りが還暦で、最近雇用延長で65とか、今ひとつは60と65の節目の中で、一応
私のライフサイクルの中では、まず60には私の理想として、国産材の無垢の木で家を建てた
いという目標があって、それをどこに建てるかっていうのが、7、8年前ぐらいの私のプロジ
ェクトで立ち上がって。いろいろな土地を探したんですね。探した時の住まいは実は上尾な
んですね。ここから7キロちょっと都心に行ったところなんですけど。ただ、自分で国産の無
垢材の家を建てたいということは土地が必要なんですね。で、本音を言うと、都心に通っ
てましたから、もう少し都心に近いところがいいなっていうふうに思ったんですけど。都心に
近づけばですね経済的な理由で、土地がどんどんどんどんちっちゃんくなるんですね。その中
で、いろいろと探してる中で、北本が、一つの一番大きいのはやはり先ほど北本市の職員
の話にあったようにですね、すごく災害に強くて地盤がしっかりしてるっていうのが、一つの
決め手でした。それと、来てもらえばわかるんですが、北本市役所はすごいすてきな建物な
んですよ。環境は市役所は第二文化会館があって、今の市役所と併設する児童館なんかもで
すね、本当に私の年齢なんてこんな孫が遊びに来た時に、ここで遊ばせるといいなと。
天気がいい時は外でいいんですけど、雨が降った時はね、格好の遊び場になります。そうい
うことで一応北本に落ち着いたんですね。

北本に行くことによって、バランス的にはある程度の広い土地が確保できたんで、そこに

住んだということなんです。で、還暦のプロジェクトですから、60の時に立ち上がって、61の時に家が完成して北本に来たということなんです。それまでは先ほど言った都心に通うわけですから、直通で50分ですから、十分通える距離だと。それでなおかつその自然が豊かだということもあって、65で会社をリタイアなんですけど、そのあと、都心の千代田区にある千代田プラットフォームというところで、農商工連携サポートセンターというところで、週2回位ぐらいいろいろとお世話になる予定だったんですけど、ご存知の通り、去年の4月に非常事態宣言（緊急事態宣言）が出て、都心に通えないということで、ピンチだったんですけど、実際そのピンチがですね私にとってはチャンスになってですね。都市に出ていけないので、北本をいろいろと散策して、いろんな人に声かけながら。その中の一人として岡野さんと出会ったんですけど。私が、「田んぼがないな」って言っていたら、岡野さんが「荒川の方に結構ありますよ」と言われて、ずっと歩いて行った時に今回このお話させてもらったNPO法人藁の会という会に出会ったんですね。実際にその辺をうちのかみさんと一緒に車で行った時にですね。その藁の会のフィールドの隣接地に、今日何かおそば屋さんやりたいという方が入ってるんですけど、「阿き津」っていう、お蕎麦屋さんがある、ここはすごく有名なお蕎麦屋さんですね。そこのオーナーであるご夫妻も藁の会の中心になってるんですが、たまたまそのご主人と会ってですね。「毎週木曜日お昼頃、みんなで賄い食べるから今度おいでよ」っていうふうに声をかけてもらったんですね。私なんか、そういう社交辞令もそのまま受け取るので、「じゃあいきます」ということで行って。実は去年の6月からですねNPO法人藁の会という会に参加させてもらって、毎週木曜日いろいろ活動すると。何かこうイベントごとは土日にあたりするんです。活動は木曜日なんですけど。そういう活動の写真を共有させてもらいながら、どんな活動してるかということを見てもらいたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思います。

○江澤 よろしくお願ひします

○西村 はい。今この画面が4つこう出てるんですけど。左側2つはですね、私の自宅の前の家庭菜園の場所なんです。左から3番目の写真が、藁の会の会員のところの大豆の育つところの写真なんです。大豆は、こんなにたくましく育つんだということで大豆を蒔いたときに、余った種を我が家の家庭菜園でちょっと蒔いてみたいなということで、蒔いたのが左側の写真なんです。それで、実はものすごい恥ずかしい話なんですけど、私は枝豆大好きなんですけど、枝豆で食べる大豆と普通の大豆と違うものかと思ったんですけど、いや、大豆になる前が枝豆なんだということで、我が家では結構大きく育ったもんですから、この写真の下にあるように、大豆になる前に枝豆で食べたんですね。だから、自分がぱっと育てたのをぱっと取って茹でて食べる枝豆ですから、本当に最高にこ美味しい思いをしたっていうのが、この写真です。

（次のスライドに移動）

この大豆は、軽トラの上にあるんですけど、刈り取って十分に乾燥させるんですね。乾燥させて、もちろん一気にぱっと取れる機械もあったんですけど、これをみんなで叩きながら、叩いて出た豆を人海戦術でゴミと何かを振るいながらやってると。この、一番右側にあるのは、普通の青大豆だけでなく黒豆もちょっとやりましょうということでやったやつのが写真が写ってます。

(次のスライドに移動)

これがそうですね、今これちょっと動画になってるんですけど、土曜日か日曜日だったと思うんですけど、子供たちも一緒に入って大豆の形がどうなのかっていうことで、こうやって叩くわけですね。で、横では賄いを準備している。熟練の主婦たちもいらっしゃるんで、いろいろな形で持ち寄りで賄いが食べれるというのが、ここにもあるわけですね。本当に、こういった青空の中で食べられるっていうのが本当に美味しいんですね。本当に握っただけだったりするんですけど、今その前では、これは畑でとれたものをこうまかないでこう食べるという贅沢ができるということがですね、何にもまして私の楽しみでもあります。

(次のスライドに移動)

はい。さっきは大豆だったんですけど、これは田んぼの状態です、一番右側のところが今どんどん成長してるところなんですね。真ん中が大分実ってきたところなんですね。一番右側が今度収穫ということで、私は薫の会では新米、新人なんですけど、やっぱりいろいろと農家さんが農業を止められるということあって、薫の会でこのコンバインみたいなものを中古で若干安く購入したりしてちょっとやってるってのが今出ている風景ですね。

(次のスライドに移動)

これは、稲を刈り取る前に機械がちゃんと動くかっていうのを、ちょうど1年ぶりに使うわけですから、その整備を先輩方が見ながらやるわけですね。

で、私自身は、遠くでとかビデオとかの映像では見たことあるんですけど、こんなに間近に見て、整備されているところを見ると、こういうふうに刈り取って、脱穀じゃないけど取っていくんだというのをつぶさに見れるっていうことですね。この年になっても何かわくわくする体験なんですね。

(次のスライドに移動)

これは、畑で取れたスイカをみんなで食べようというんで、いろいろな切り方があって、「こういう切り方がいいんじゃない」とスティック状にこう切っておしゃれに食べたりですね、美味しいわけです。そうこうしているうちに、時間はちょっとずれるんですけど、左上の写真はずっと向こうの荒川の沈む夕日ですよ。夕日であるとか、雨の上がりのときにすごい虹がかかる、全然合成じゃないですかね。笑

こういう風景を見ながら皆さん交流しながら食べると。で、やっぱり何が一番良いかと。このスイカは誰々さんがこういう形で育てたんだよっていう、顔が見えるものを食べれるっていう幸せですね、先ほどあったようにその伊藤ファームさんがこういう形で採れたサツマイモが焼き芋になったものを食べられるのも、やっぱりね今日、見られたと思うんですけど、

どういう気持ちでやられてるかっていうのが分かって食べる焼き芋はまた格別なんですね。そういったことを楽しみながらやっていると。

(次のスライドに移動)

実際は、機械を買って刈るわけですね。3、4人でグループで田んぼを担当してますから。稲刈りが1回だけじゃないんですね。要するに何回もやって、第1弾、第2弾、第3弾ってやるわけですね。それはやっぱりお互いがお手伝いをしながらやっていくと。で、田んぼによっていろいろとやっぱりこう性格が違いますからね。ぬかるんでるところなんかは、機械が入らないから、手で刈らないといけないってということで、手で刈ったりとかっていうこともしながら。やっぱりこういうことを考えると本当に、みんなでこう共同するっていうことが大切なんだなということも、この歳になって感じてるといふことになります。

(次のスライドに移動)

この辺の雰囲気は、私も小さい頃、もともと山口の田舎の方ですから。「あ、そういえばこういうのは外であったな」とか、こういうところに入って藁を投げ合って農家さんに怒られたなとかっていう思い出があるんですけども。

みんなと、こうやってやれる作業っていうのが、やっぱりいつも大変は大変なんだけど、すごく楽しい体験をさしてもらいました。

(次のスライドに移動)

今度はこのはざかけ（刈った稲を干すこと）したのを脱穀するわけですよ。脱穀したものを、本当に簡易なんですけどちょっと納屋があつて、そこに入れて、一応はざかけはしてるけどここで乾燥させるわけなんです。これも、別にの本格な農家の感想というよりはですね、写真の下にあるように、ただ単に送風してちょっと乾燥しましょう、というような簡易なものなんですけど。ちゃんとシートを敷いて、このシートの上が誰の田んぼというのをちゃんと区別しながらやってるっていうのも、さすがだなというふうに感じました。

(次のスライドに移動)

それでやっぱり、こうして汗をかいた後で、その場で取ったピーマンだとか、これはほとんど野菜カレーだったりするんですけど。そこのかまどで炊いたご飯と一緒に食べるカレーがやっぱり本当にもう最高においしいですね。外ですけど、ちゃんとソーシャルディスタンスもある程度とりながらですが、皆でこのようにしてやることは、食べるためにやってるのかもしれないけど、楽しい時間です。

(次のスライドに移動)

これは12月末に餅つきをしようということで、真ん中の写真の下のところは釜で蒸してるんですね、もち米を。一番左側は「藁の会」ですから、年末のしめ縄を作りますよと。仲間の中にそういったわら細工をやる方がいらっしやって、指導に来ていただいて、いろいろとっている合間にしめ縄づくりわやりました。私も自宅に飾るしめ縄を作るという初めての経験をさせてもらいました。一番右側、そのつきたてのお餅で食べてるお雑煮なんですね。これもつきたてが美味しいと。

それからもう一つ、写真には出ていないですけど、最初言った「阿き津さん」ってのお蕎麦屋さんがあるんですけど。阿き津のご主人が、あそこでもおいしい鴨蕎麦だとかがあるんですけど、やわらかい部分はちゃんとお客さんに出すんですけど、（それ以外の）若干固い部分を使って似た鴨汁で雑煮を作ってますね、これがまた最高に美味しかったですね。ただまあ、私も手伝ったりしてたんで、本当はお餅を丸めるところの写真があればよかったんですけど、それがなかったんでちょっと餅つきの風情はないんですけど。そういう年末の風景ですね。

（次のスライドに移動）

これで年が変わって、活動するのは毎週木曜日なので、今年も2回ほど活動してるんですけど。もう今から、田んぼが枯れているときに今年やる田んぼの準備をするわけですね。ですから、畦をちゃんとこうしてですね。やっぱりいろいろとするから、水路が少しつぶれてたりするのを、ちゃんと水路が流れるような準備をするっていう。やっぱり基本的なことをちゃんとやっていかないといけないというようなことなんですね。作業をしている合間にちょっと休憩をしているときにですね、今度一番右側にこう写真があつてちょっと小さいからわからないかもしれない。

これ結構大きいなんてサギじゃないかって言ったら、「オオサギ」だっていうことだね。オオサギが餌を探しに来るぐらいその自然豊かな環境で作業をさせてもらうというのは、本当にいいなというふうに思ってます。

（次のスライドに移動）

いろいろ写真を撮ってますね、特に左側の3枚なんかは、彼岸花はちょうどお彼岸の時期、9月の末ですが。彼岸花とはざかけの稲が素敵なんじゃないかと、入れさせてもらったんですけど。「藁の会」でも、一応お花の担当じゃないけど、お花が好きな人がいて。みんなが散歩してる通路側に花があるといいんじゃないっていうことで、育てたんですね。ですから、そういった環境を、みんな役割分担でやれることで参加できるということなので、より気楽に参加できるんじゃないかなというふうに思ってます。

先ほど、今井さんところの栗拾いの話があつたけど、私も参加させてもらって。こんなに大量の栗が、本当に自然に落ちてるんです。これは写真のために集めた訳じゃなくて、こういう感じ落ち落ちてるんですよ。じゃあ、栗ご飯をやりましょうと言ったときの栗の量を見てくださいよ。これは、栗のおこわなんですけど、これだけ贅沢に栗を入れて食べれるっていうのは、やっぱり最高の贅沢なんじゃないかなっていうふうに思っています。

本音の部分では、北本市よりも都心寄りの場所に住みたいと思っていたりしたんですけど、結局バランス的にですね、ちょっと行けば都心がある、かといって、すごい田舎かっていうと、駅周辺などはある程度しっかりしている（便利である）、今私は本町1丁目（北本市役所周辺）に住んでるんですけど、この「藁の会」のところまでは歩いて30分ぐらいの圏内なんですね。ですから、私のウォーキングコースはその辺をぐるっと回ってきて、1時間くらいなんですけど。こういった環境が良いということと、6万5,000人っていうぐらいの都市の

規模としては、（住民同士や役所の人達の）顔が見えること。引っ越してから、引っ越す前からなんですけど役所の方々がすごく親切というか、丁寧にいろいろなことをサポートしてくれたので、本当に良かったなと感じています。「薫の会」もまだ、メンバーになってから一周回ってないんですけど、世の中が非常事態宣言（緊急事態宣言）と言われてる中ではのびのびと暮らさせてもらって本当にありがたいなって感じているのが最近の感想です。

どうもありがとうございました。

○岡野 ありがとうございます。時間的には、もうそろそろ交流会（注：都合により交流会は行いませんでした。）の方にこのまま移ればいいと思うんですけど、ちょっと観光協会の方から補足させていただくと、西村さんが「薫の会」のメンバーに加わったのが今年の6月ということですね。今の西村さんの資料を見てると、本当にそんなに短い期間と思えないほどの活動をされていて。で、「薫の会」さんは、もともと遊休農地を活用して、好きな方が集まって田んぼのオーナー制をやるっていう団体さんなんですよ。そこの皆さんが集まって、西村さんの方がコミットいただいて、そこで今年1年間参加していただいたってことです。西村さんが最初に観光協会に来ていただいたときに、「薫の会」をご紹介したんですけど、その後に西村さん行っていただいて私もすごい嬉しいなって思っていて。「薫の会」さんも、西村さんって実際若手って言われるじゃないですか。笑

○西村 そうそう。笑

○岡野 私もめちゃくちゃ若手だと思って、西村さんにめちゃくちゃ期待してるっていう。やっとな若手が入ってきたっていう感じで。最初の感覚とかどうでしたか、「薫の会」の受入れ感というか。

○西村 中心なってくれている吉田さんという方がいらっしゃって、丁寧にいろいろなことをサポートしていただける部分ですごく入りやすいのと、先ほど言ったようにですね、何かちょっと一緒に物を食べるっていうのはですね、すごくハードルが低いんですよ。

○岡野 これでもかっていうくらい、ご飯の写真が出てきましたもんね。

○西村 だから、何か難しい理屈っていうよりは、こういうものができたから一緒に食べようかっていうことですから。一緒に美味しいねっていうのは本当に共有しやすいんですね。

○岡野 良かったです。それは嬉しいです。

○西村 ハードルが低いなと思って。

○岡野 ありがとうございます。移住する際に交流がどうっていうご質問もあったと思うので、ざっくばらんにやっばご質問いただければ、何かこの後の時間是非お答えしたいと思いますので、はい。

【セクション5：事前質問への回答・終了のごあいさつ】

○林 はい。本日の内容は以上になります。

最後に、事前に皆さんからご質問をいただいていたのを、チャットの方に、今県の方から共有いただけてますので、もしそちらの方を見れたら見ていただけたらいいですけど、チャットの方を開けますでしょうか。

○岡野 真ん中の方にボタンが下の方にボタンがあって、チャットを開くページがあると思うんですけど。

○林 ちょっと時間もあと残り10分ぐらいしかないので、簡単に答えさせていただいて。いつでも、北本市役所長公室のシティプロモーション担当の林か荒井までご連絡いただければ、詳しくお答えさせていただきますし。あと北本市内をちょっと回ってみたいとかっていうのがあれば、いつでも一緒に回らせていただきたいと思いますので、その時はお声掛けいただければと思います。

チャットの方、質問なんですけれども。まず、「貸し農園は有りますか？」という質問いただいている。先ほど今井さんから、是非農地も借りていただけてっていう話があったんですけど、そういった情報を知ってる方がいたら我々の方でもつなぎますし、あとはいろんなNPOの法人とかが、貸し農園みたいなことをやっていたりして。例えば、「ごみ減量推進市民会議」っていうところが、市内で家庭の生ごみとかを堆肥化している方には農園を貸しますよとか、いろんな取り組みがありますので、その辺を紹介させていただければと思っています。

○岡野 ちょっと補足なんですけど、私実家が北本の農家で私も貸し農園やってますんで。

(一同笑)

○岡野 言ってもらえれば、もう1区画年間3,000円なんでよろしくお願いします。

○林 そんな感じ、いろんな繋がりがありますので、その中から皆さんにご提供できればと思います。

あとは、「埼玉在住のメリット／デメリット」。ここは北本なので、埼玉を北本に読みか

えるということで。今、いろいろ見ていただいたように、本当に首都圏というか東京にも近くて、そこまで通われてる方もたくさんいます。であるにもかかわらず、すごい自然が残ってたりとか、ゆったりと暮らせるっていうところが北本のメリットかなというふうに思います。北本もですね、今年17年ぶりに転入が増加、転入・転出で転入の方が超過して、社会増という形になったんですけど。やっぱりコロナもあって、いろいろ暮らし方、皆さんの考えがちょっと変わってきてるのかなっていうところもあって。首都圏で暮らすっていうところで、地方とか、ゆったりとした暮らしっていうところに目を向けていただいているのかなというふうには感じているところです。それで、北本市のデメリットはですね、個人的には電車で東京通われる方が多くて、その電車が止まっちゃうと東京への動線が、北本の場合はJR高崎線っていうので皆さん、電車で通われる方が多いんですけど、電車止まっちゃうとなかなか東京まで出れないというか、交通手段がないっていうところがやっぱりデメリットとして上げられやすいところかなっていうのを感じています。

続いての質問、「病院やクリニックの充実度」っていうところなんですけど。北本市は狭い地域で、駅が真ん中であって、東、西の果てまで、大体歩いて30分ぐらいで行けてしまう、4、5kmとか。南北にもし4、5kmぐらいっていうところで。区域に沿って、市内一周回っても、ハーフマラソンくらい、20kmぐらいしかないということで、すごい狭い市域なんですけど。その中に、病院が40個以上ありまして、いろんな種類があったり。歯医者に至って26個あったりとか、選びたい放題っていう形。後の北里病院っていうすごい大きい北里大学の病院も北本市内にあったりとか。近くの上尾市には上尾中央病院とか、がんセンターとかすごい大きな病院があるので、比較的、病院には困らないかなというふうに思っています。

で、次の質問が「小学校の1クラス当たりの人数」なんですけど、大体30人ぐらいですかね。で、小学校低学年に関しては30人学級ということで、30人を超えないように、市の補助金を使いながら低人数でやっているというところですし。多くても、大体3クラスあって30人ちょっとぐらいっていうところが平均かなと思います。

「どちらかという不便だなというところ」（質問）、さっき言った電車のくんだりとか。岡野さん、何か他にもありますか。

○岡野 いや、ないんじゃないですかね。

(一同笑)

○岡野 車がないと、生活はちょっと。やっぱり地元組は車大好き、ちょっとエコじゃないんですけど、最低限にはしたいと思ってはいるんですけど。やっぱり車があると便利だなと思うところはあって、ただ隅々までそれなりにバスとかはあるんですけど。最近自転車で移動する方も結構いますよね。土地が平たいから。本当にあんまり思い浮かばないと個人的には思います。

○林 東京までは50分っていうところをどう捉えるかっていうところですかね。毎日通うとなると少し大変だと思われて、もう少し都会よりも住みたいっていう思いを持つてらる方はいらっしゃるかもしれないです。

○岡野 そうですね。私は市内に観光協会の事務所があって、毎日自転車か歩きか、寒いと車で、通常歩きで行ってるんですけど。もう電車で多分半年ぐらい乗ってなくて、それでも別に普通に生活はできるし、満足しているの。ちょっとその部分がそうですね、こういう暮らしが楽しいと思う方は多分北本も多分楽しいいただけるかなと。

○林 ただちょっと後ほど出るんですけど、就業の機会とか、その働き口があるのかっていうところはやっぱり少し少ないかなっていうところはってどうしてもあります。就職先が介護だとか、スーパーとかサービス業が多い。逆に、大型の工場とか、工業的な事業者が少ないっていうところがあるかなというふうには感じます。

あと、「北本市育ちの住民と移住者との交流はうまくいっていますか？移住する場合に心がけるといいことがありましたら教えていただきたいです。」っていうようなご質問いただいているんですけど。私も北本市役所入るまでは近くの上尾市出身で、北本市役所に入ってから北本に移住して来て、10年くらい住んでっていうところなんですけど。北本の方々は比較的みんなオープンというか、外から来る人に対して全然抵抗がないと。何かむしろ、来てくれてありがとうぐらいのイメージが。強いなあというふうには思っているの。「外から来てるのかよ」っていうふうには個人的に全然ないかなと思いますし。市のイベントとかもやっても、移住組の方と、ずっと住まれてる方っていうのはうまく混ざってるなっていう印象があるので、そこまで気にする必要はないかなと思いますし。何か不安なことがあれば、我々（市役所）のところに来ていただければ、いろんなイベント紹介したりとか、いろんな方を繋いだりということができますので、ご相談いただければと思います。

次の質問、「就業機会、職種、人口」。人口は今6万6,000人ぐらいですね。年々、500人ぐらい減ってきてたんですけど。転入が増えて社会増してるんですけど、どうしても亡くなられる方と、生まれる赤ちゃんの量が、自然増減の関係もあって、マイナス100人ぐらいにはなりそうなんですけど、今6万6,000人ぐらいというところなんです。

で、「教育機関」ということで、小学校8校、中学校4校、で高校が1つ。あと専門学校とかがあって、大学がないというような状況になってます。

次の質問が、「住宅取得補助」、多分移住にあたっての補助制度っていうことだと思うんですけど。北本市独自っていうのはあまりなくて、埼玉県で出してる多世代住居の補助金とかっていう形のがありますが、市独自はほとんどないかなというところなんです。最後の質問「子育て環境とかの支援」ということで。北本氏は0歳児おむつ無料実家事業とか、あとは、病児・病後児保育やったりとか、ステーション保育っていう駅でお子さん預かるって

いう制度をやっていたりとか。あとは市役所に先ほど西村さんもおっしゃってくれた児童館が併設されていて、市役所も5年前くらいに新しい庁舎ができたんですけど。その児童館もすごい市外の方もいらっしゃるような人気の施設になってます。例えばこういった自然が多く残ってるので、子育てするにはすごくいい場所かなというふうに、感じております。

以上、駆け足になってしまったんですけど、一応15時までがめどだったので、ご質問の回答は以上になるんですけども。もしこれ以上何かございましたらいつでもメールなり、電話等でお聞きいただければと思いますので、よろしくをお願いします。

じゃあ最後にちょっと荒井の方から、一言付け加えて説明させていただければと思います。

○荒井 皆さん、本日はオンラインツアーに参加いただきありがとうございました。配信の関係で映像が乱れた部分があり、この場を借りてお詫び申し上げたいと思います。

今回参加いただいた方には是非北本のことを知っていただければということで、皆さんがセミナーに登録(申込)いただいたときのご住所に「&green (アンドグリーン)」冊子ですね、北本市の情報が詰まった冊子を今後お送りさせていただければと思いますので、ご覧いただければと思います。さきほど林の方からもありましたが、何か北本市についてお知りになりたいことがあれば、北本市の市長公室までお問い合わせいただければと思います。

皆さん本日はご参加いただきましてありがとうございました。